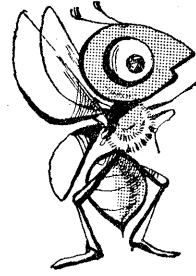


子供処世術



私の観察記録の中から、できるだけ栄養価をそこなわないようにと「ナマの話」をここに提供いたします。

五十嵐静江

級の三分の一を占めるだろうか。

ミルキー、ミルキー、

ミルキーは、ママの味

口ずさむ歌や会話にテレビの影響と思われる傾向がみえる。

「今夜、のり平の面白いのやるよ、でもつまらないよ、先生に話したってわからないんだもの。先生の家テレビないんだろ！」

こういう時の先生は、聞こえているのかいないのか、ちょっと子供たちでは判断しかねるような、あえて複雑な面持ちをしている。

× × ×

テレビがあっても、やはり子供たちは外に遊び場を求めてやまない。

菓子屋、精肉屋、寿司屋にバチンコ屋、文房具店に本屋、いずれも住居の大半をお店に提供している家庭の中で、兎角子供の存在はちらちらと気忙しいものになりがちだ。多くの子供たちは拾円、貳拾円、五拾円と、お小遣いをその都度渡されて、遊びに出る。その辺の事情を心得た子供たちが、今日も夕食までの遊び場を求めて、子供同士でデパートに流れ込んでいく。

高島屋にいこう、五階のおもちゃ売場、屋上、それから特売場がかくれんぼしよう。人が一杯いてなかなか見附からないぞー。

雨の日のこと、高島屋で遊びあきた子供たちが丸善にいっ

批判

長いお休みが終って始めて子供と顔を合せた日、「先生、風邪ひいたみたいな優しい声だすの、ね。」スベリ台の上からこんな声がかかる。

「え？ そういえばそうね。そのうちにだんだんこわい声を出すようになるわね……。」

子供って、とても上手に痛いことを云う。

職員室から電話をかけても、「先生、今どちらの公衆電話においでですか」と問われるほど、都電や自動車の警笛や騒音の絶えない地域で、日本橋の子供たちは生活しているのである。

「騒音には静かなる声をもって抗すべし」の保育技術も、こうして反省の機会に恵まれるのである。

× × ×

近頃、園児の家庭でも、ぐっとテレビの購入が多くなった。

た。丸善のエレベーターはすいている。一階から二階、二階から三階へ、そしてまたやりなおし。小さいお客様には違いないが、とうとうエレベーターガールの目にも余り、「いけません、お家へお帰りなさい」と叱られた。仕方ない。今度はどこへ行こうかな、そうだ地下道をとおつて白木屋へいこう。金魚つりやっているかな。白木屋にあきると東京駅の名店街に、そして観光ビル、大丸にと子供たちははてがなない。

庭がない。公園がない。遊びたくても安全な場所がない。限られた解放時の校庭以外、この地域の子供たちの遊び場は路地・だからといってこの幼い子供同士を手放してデパートにやっつて傍観してられるだろうか。何が目に触れ、耳にとびこみ、分別のない子供の心をどんな誘惑がゆさぶることか知れない。先生も子供もこの問題に關しては真剣である。立場は違うが、お互い問題の比重に大差はない。それでいつても、「大きい人と一緒でない時には、デパートには行かないこと、必ずお附添いの人と一緒にいくことを約束しましょうね。」ということになるのだ。さて、

「先生、それがちよいちよいなんです。幼稚園で、子供同士では、デパートなどに行かない約束のあることは、よくよく知っているのに、それでも内証でいってしまうんですから。」

或るお母さんからこんな報告があった。しかし母親のいい分は、遊び場のない子供のいい分を聞いてからでは、どうも通用

しないという。といって、放っておくわけにもいかないという。「それで昨夜は、とうとうお父さんと二人で、徹底的にあの子をこらしめる事にしたんです。」

明くる朝。

「ゆうべは高島屋にいつて、お父さんに叱られたの？」

「うん、平気だい。こわくもないや」

「何て叱られたの、本当はこわかったんでしょ」

「ははは、僕のこと、タンスの上に立たせたの。面白かったよ。」

小さい親指のつけねには、おきゆの跡がみえたりして、親にとつても子供にとつても、その夜は悲喜劇的一幕だったそう
な。

見聞

「おはようございます。先生、ね、今来るとき、昭和通りで、かずおちゃんが、おとみさんうたったの。それでね、僕が交番のおまわりさんがいたから『今、かずおちゃんはおとみさんをうたいました』っていいつけたんだよ。おまわりさん笑つて、おこらなかつたの。」

粹な黒髪みこしの松、メロデイにのせてみると、むずかしい言葉も簡単に覚えてしまうものですなと、或る人は感心したというが。

ジャンケンするなら、こういう具合にしゃんせ、とジャンケンに声援を送ったり、田舎の舟は、おんぼろ舟よと、クレヨン画に専念したり、子供の見たこと聞いたことは、いかにも

いきがよくてビチビチはねる。

五月の風に吹かれながら、貸切りバスで、砧の緑地帯に出かけた折にも、高々と鯉のぼりの泳ぐのをみれば、すかさず、バスより高い鯉のぼり、と力一杯うたいまくる。こんな即興に先生もたちたち。経験何年にして不惑となるや。

環境

毎朝登園から一時間ほど、グループ活動が行われる。ままごと、積木、粘土、えのぐ絵、指絵、クレヨン画、チョーク画、木工等、思い思いの遊びを堪能しながら、うまい具合に個々のグループが連絡している。積木の電車や自動車は、ままごとの家から出勤するお父さんの乗物となり、粘土の机に受話器をおけば、「ちょっと、お寿司一人前、大至急」という運びになる。

「雨よ、雨が降ってきました。」

女の子がお人形を抱いた肩をすぼめながら家にとびこみ、

「あら、お父さん大丈夫かしら。傘がないのよ」と案じ顔をすれば、部屋の片隅から電話がかかる。

「もしもし、あのね、今日はね、雨が降ったから傘もってきてね。銀座の松屋のね、地下の右っ方で待っているから来てね。」

「今、持ってくるから待ってて——」

又、別の子供から、

「もしもし。お母さん？ お父さんいますか、ね、ね、傘もってきてくれ。会社にいるから」

「自動車で行くから、傘いらないでしょ。」

ふー、ふふー。積木の車が走る。

「おい、迎えに来たよ。タクシーに乗れよ。」

よくみれば、タクシーの積木に70えんと、チョークでかいてあった。

科学

自然の移り変りを、わずかに校舎に絡んだ、つたで知る子供たち。朝顔の鉢植の土を、

「どこへ行っても土がありません。探して砂をこれ一杯買ってきたのですが」という日本橋。私の家は、都下もその南端、五分も歩けば神奈川県に入るといふ所にあるので、無論、自然に恵まれ、澄んだ空気に恵まれ、見晴しのきく風景にも恵まれて余りあるという風、それでなおさら、土を知らない子供たちが可哀想に思われる。

雛祭りには、デパートのウィンドウから。お月見は絵本から知る子供たちの為に、何とかして本当のものに、手で触れ目み、遊ばせてやりたいものと、庭のすすきを切っていたことがある。

「これ、何かしら」

「草」

「おこめの木」

「はっぱ」

「これは、十五夜の晩にかざるすすき、山や野原ですすがが風

供の知恵には、ぐっとつまる事がある。

× × ×

遠足の印象画をかくことになった。一人だけ紙一杯に、ゴジラとアンギラスの絵をかいている。

「あああ。いけないんだ。先生が緑地帯へいった絵っていったんじゃないか」

「いけないんだ。いけないんだ」

男の子は大さわぎだ。実のところ、みんながこれをかきたい。だからこの際許せないというところ。

「だってさー、僕、バスで帰るとき、ゴジラとアンギラスの看板みたんだもの」

— × × × —

まだ経験は浅いのですが、子供たちの生活の中にあって、一つの事例にぶつかつたとき、或る角度だけから事をみ、事を判断し、事を処理することは、大変危険なことであるという事をしめじみ感じます。

あらゆる角度から子供をみることに、そして理解することは、私たちの第一の仕事であり、望ましい保育が計画される根本資料を得ることであると思っています。

日頃の観察記録の中から、いくつかを拾い出してみました。これからもあらゆる機会に子供たちの観察を続けていこう。

(中央区立城東幼稚園)

子どもの眼



あ

過ぎつつある年を省みつつ、私のつたない経験の中から様様な失敗と成功が思い浮かんで参ります。

高橋 芳子



幼児と共に生活する毎日、思いがけない事があります。

何の変化もない様な場面、事柄に付て起る思いがけない事を如何に処理して行くか？ ともすると、こちらの都合や情性で片付けられて了う事、心に計画されていない事丈に、こうした所に失敗がありそうです。しかし又、こんな時こそ忘れがちな子供の心を理解する機会となり得る事が多く、成功への収穫となります。

次にこうした毎日の中から、何かしら感じられた二、三例を記してみましよう。

1. 一学期の或る日のお辨當時、みんなうがいをするまで椅子に座り各々お辨当を出したりしている。私も注文のパンを分け出した頃、未だバスケットの前に、キョトンとした子供がいる